

*The Journal of  
Nagasaki University of Foreign Studies  
No.23 2019*

長崎石刻漢文資料初探

野 田 雄 史

長崎石刻漢文資料初探

NODA Takeshi

長崎外大論叢

第23号  
(別冊)

長崎外国語大学  
2019年12月

# 長崎石刻漢文資料初探

野田雄史

## 長崎石刻漢文資料初探

NODA Takeshi

### Abstract / Short Outline (概要)

我一直以來致力於對佐賀縣內存在的石刻漢文資料進行調查。佐賀石刻漢文資料有一箇特色，那就是佐賀一帶神社の牌門（日語叫鳥居）常常是肥前鳥居形式，那種形式的鳥居門柱上常常有很長的祈禱文。那麼，在佐賀旁邊而互相有影響的長崎縣的情況怎麼樣？有沒有肥前鳥居？有沒有門柱上的祈禱文？

在這篇文章裡，會言及到幾個石碑上的碑文，作為將來進行研究的基礎。

### キーワード

石刻漢文 石碑 碑文

## 0. はじめに

筆者はこれまで佐賀県内の石刻漢文資料について調査をし、その成果を「佐賀石刻漢文資料初探」（『九州中國學會報』56 2018）、「西有田・山田神社境内の石刻漢文悉皆調査」（『長崎外大論叢』22 2018）で公表した。

筆者が特に佐賀県内に注目した理由は、一つには当時佐賀市に住んでいたことがあるが、もう一つ、佐賀平野に特徴的な「肥前鳥居」という形式の鳥居に、通常刻まれる短い吉祥語・年月等の他に、比較的長文の祈願文がよく見られ、当時の漢文資料として有用であると考えたからである。この肥前鳥居は、基本的には佐賀平野から筑後平野にかけて分布するが、域外であっても、福岡市の箱崎八幡宮や添田町の英彦山のように、由来があって肥前鳥居が奉納されていることもある。

そこで、佐賀平野に隣接し、佐賀藩とも関わりの深い長崎県においても、何かしら関連するものはないかと発想し、現在住んでいる長崎地区における肥前鳥居の存在を確かめ、あわせてそれ以外の石刻漢文についても基礎的な調査に着手した次第である。

## 1. 長崎の肥前鳥居と石刻漢文

この報告のそもそものきっかけとなったのは、長崎に転居してすぐに訪れた諏訪神社で肥前鳥居を見かけたことである。諏訪神社は路面電車の電停横から階段の参道が始まっているが、参道にあるたくさんの鳥居の中、二ノ鳥居だけが肥前鳥居である。ただ、形式は肥前鳥居であるものの、刻字は一

般的なものとなっている。諏訪神社そのものの歴史に関わりがあるという話を聞いたので、佐賀藩と関係があるのかないか、何か関連する由緒はあるのか、わかる範囲で調査をして行きたい。<sup>1</sup>

実際にいくつかの神社を訪れた範囲で、長崎地区に肥前鳥居は多く見られるものではなかった。その中で、長与町齊藤郷の岩淵神社には肥前鳥居があった。享保五年庚子（1720）の紀年があり、現存する鳥居としては古い部類に属する。紀年の他は刻字はない。この神社で面白いのは、拝殿前の狛犬が「肥前狛」の形式だったことである。狛犬は結界を守護するために外敵に対して威厳を示すのが通常であるが、肥前狛は素朴な造型で愛嬌があり、愛好家からは親しまれている。肥前鳥居と肥前狛はどちらも佐賀平野に特徴的な形式であるため、この両者がセットで置かれていることには何の不思議もないが、それがなぜ長与町にあるのだろうか。長与は当時大村藩からの海路があったが、直接佐賀藩と何らかの交渉があったのか、今後の考察が必要である。<sup>2</sup>

同じく長与町の高田郷にある天満宮にも肥前鳥居があった。こちらの鳥居は紀年によると宝永七年（1710）の建立で齊藤郷の岩淵神社よりも更に十年古い。この天満宮はもともと中世城郭の東高田城があった場所に造営されており、肥前鳥居である一の鳥居から急傾斜の石段を登り切ったところに本殿がある。境内は狭いため、往事の手がかりは他には特にない。長与の港から長与川・高田川沿いに遡って時津街道に出る道筋に位置していたと思われるが、そのことと肥前鳥居であることとの関係の有無についても考察が必要である。

長崎県内には直接佐賀藩と交渉があった地域が点在している。たとえば諫早領、神代領、深堀領等がそれである。その中で神代領は、そこに遺された武家屋敷が「神代小路」として観光開発されており、<sup>3</sup> 当時の面影を知れるのではないかと期待して調査に訪れた。そして実際に肥前鳥居を三基見付けた。ところがその中の二基がかなり変わった状態であった。それは、鳥居を構成する要素の全てに文字が一切刻まれていないことである。唯一文字が記されているのは上方に掲げられている扁額の中のみであった。

鳥居の柱の表面には通常紀年・奉納者名・奉納事由・吉祥語等が記されることが多い。とりわけ紀年と奉納者名は遺産として受け継いでいくための大事な情報なのだが、それらの情報が一切記録されていないのである。小さな集落の簡素な社殿の神社の前に、細い丸太を組み合わせただけの無銘の鳥居を見ることはあるが、石造の鳥居で無銘のものは珍しいのではないか。今後の調査で類例に注意したい。

## 2. 神社の境内の石刻漢文

石刻漢文といえば、通常すぐに想起するのは顕彰碑である。顕彰碑は何も佐賀に限らず全国至るところにあり、近世のものは漢文、現代のものは和文で書かれているのが一般的である。近代のものは前半は漢文が多く、後半は和文が多い。顕彰碑はゆかりの場所に建てられることも多いが、様々な事情で神社の境内に存在することもある。以下に、これまで見かけた顕彰碑を列挙する。

### (1) 笹山蕉川碑

松森天満宮の北の隅にある。<sup>4</sup> 松森天満宮は職人達の作業の様子を活写したレリーフの「職人尽」

で有名であり、諏訪神社が現在地に移る前に鎮座していたことでも知られる。笹山蕉川は江戸から明治にかけて活躍した教育家のようだが、詳しくはこれから碑文を読みたい。

## (2) 酒田恒山碑

諏訪神社の社殿右手奥にある。酒田恒山は出羽出身の武芸者で、長崎に来た時に地元の人々に指南をして慕われたらしい。石碑の前に説明文があり、そこに「碑文を三面に彫る方法は、大変珍しく、」と書かれている。だが、三面に碑文を彫ること自体は普通のことである。薄手の板状のものであれば表裏の最大二面しか使えないが、角柱であれば四面全てを使うことも可能である。<sup>5</sup>ただ、そのような場合はそれぞれの面を独立したシートとして使うものであるが、この石碑の珍しい点は、三面を区切らず、まるで一枚の紙をゆるくコの字型に折り曲げたように、連続する一つながりの平面として使っているというところである。そのため、正面両側の角はなく、角に当たる部分にも碑文が彫られている状態になっている。

また、一つ面白い特徴を指摘できる。碑文の末尾の方だが、最後の四行は次のようになっている。

吾無所祕惜皆曰訓格之言不堪銘肝同志相  
謀引石勒之恭建于  
玉園之壇左以爲不朽師云 時  
文化十季歳在昭陽作■臘■■■門人謹記 ( ■ は不明の文字を示す)

後ろから二行目の「玉」の文字だけ上にはみだしている。また、その前の行は下に空白を残している。前の行の改行は、その行末で意味が切れるわけではなく、「玉」のはみだしと合わせて、「改行擡頭」<sup>6</sup>が行なわれているのであるが、通常の擡頭はその文字の分も合わせて碑面を整え、擡頭のない行については文字のないスペースが置かれているのに対して、この石碑は通常の行頭で碑面を揃えてあり、この行のみ一文字分上に碑面がはみだしている形になっている。ある意味で、原稿用紙のスタイルを忠実になぞる格好になっていて面白い。

## (3) 水神神社碑

「顕彰」とは少し違うかもしれないが、由緒や縁起を記した碑文も神社境内でよく見かける。

水神神社は本河内水源地のすぐ下流に位置し、水源を祀る役割を果たしているが、この碑文も倉田という人が水を引いたことについての記録のようである。

## (4) 八坂神社記

八坂神社は崇福寺の南隣にある、江戸初期に創建されたらしい神社である。<sup>7</sup>その境内に「八坂神社記」と題する碑文があり、明治二十一年(1888)の紀年がある。この神社の縁起が記してあるものと思われる。

### 3. 祝詞の石刻

諏訪神社下から蛍茶屋にかけての旧道沿線の調査をしている時に、沿線の中川八幡神社でかなり奇妙な石刻漢文を見かけた。旧道から参道の石段を数段登ったところの参道の左右に燈籠があるが、その燈籠に刻まれている文が読めないのである。

#### 中川八幡神社燈籠文

文政六癸未年九月日  
土方君乃幸福乎祝爾  
祝弓石以造連留燈籠袁  
奉留登長崎市人等畏畏白

たとえば「乃」は通常「すなはち」と訓じる副詞であり、その後に動詞を伴う。だが直後は「幸福」であり、これは通常は名詞または形容詞で、動詞で使うのは珍しい。またその後にある「乎」は通常は詠嘆または疑問・反語の文末語気助詞で、その直前は動詞または形容詞の述語である。「幸福」は形容詞にも使えるので、「幸福なるか」とでも読むのだろうか。それにしても「弓」や「袁」等は固有名詞くらいにしか使わない文字で、どう処理してよいやら、と頭を悩ませている時に、この意味不明の「弓」が、万葉仮名としてはよく使われることを思い出した。すなわち、

文政六癸未年九月日  
土方君の幸福を祝に  
祝て石もて造れる燈籠を  
奉ると長崎市人等畏畏白

であり、和文であって筆者の研究対象ではないが、珍しいのでここに収録しておく。

なお、対は「土方」が「高橋」になっている他は同文で、神社での祈祷に使われる祝詞の文のようだ。だとすると「土方」と「高橋」は地区の大姓なのだろう。再訪する時に境内を観察してあとづけたい。

### 4. 今後の展望

以上、長崎地区のこれまで調査した石刻漢文について概観してきた。とりわけ筆者が関心を持っているのは肥前鳥居の分布と銘文の有無だが、佐賀藩領である神代地区とそれ以外とで特に有意差は見られなかった。神代地区には確かに肥前鳥居があったが、無銘もしくは一般的な銘文のみであり、佐賀藩領ではない長与町にある肥前鳥居とさしたる違いはないように見えた。佐賀藩の影響下にあった地域は、深堀地区等他にもある。それらを調査して、佐賀領とそれ以外で何か違いがあるのかを確かめたい。

また、本文中で顕彰碑等の記録をしたが、一回の訪問で全文を解読するのは難しい。これから何度か再訪調査を繰り返すことで、内容を解読し、長崎の石刻漢文の特徴を考察していきたい。

## 注

- <sup>1</sup> 公式サイト <https://www.osuwasan.jp/index.html> (2019.11.13 最終確認)
- <sup>2</sup> 但し、刻字部分の大半は石灰のようなもので覆われ、その上から線刻されている。もしかしたら欠落部を補った時に刻字部分も改めて彫り直した可能性がある。その場合、内容にどの程度の信頼を置いてよいか慎重になる必要がある。
- <sup>3</sup> 文化遺産オンライン <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/188526> に紹介がある。(2019.11.13 最終確認)
- <sup>4</sup> 公式サイト <https://www.matsunomori.com/index.html> (2019.11.13 最終確認)
- <sup>5</sup> 以前取り上げた西有田山田神社の草場佩川撰文碑がそれで、正面が草場佩川による水路築造記念碑、残りの三面が山田神社境内社である八坂神社の石段の築造記念碑となっている。(野田雄史「西有田・山田神社境内の石刻漢文悉皆調査」『長崎外大論叢』22 2018)
- <sup>6</sup> 改行擡頭とは文章中に出てくる皇帝の名等、絶対的に尊敬の対象になる名詞を文中に埋没させないために改行し、一字(場合によっては二字)他の行よりも持ち上げて書く習慣である。
- <sup>7</sup> 公式サイト <https://www.yasaka-jinja.net/> (2019.11.13 最終確認)

今回の報告に関わる調査地点と調査日

諏訪神社(長崎市上西山町) 2017.04.09 2018.08.30

岩淵神社(長与町齊藤郷) 2019.05.23 2019.09.23

天満宮(長与町高田郷) 2018.04.29

摩利支尊天社(長与町吉無田郷) 2018.04.29

雲仙市国見町神代(淡島神社・熊野神社・大神宮・神代神社・八幡神社) 2019.04.28

松森天満宮(長崎市上西山町) 2019.03.03

水神神社(長崎市本河内) 2019.03.03

八坂神社(長崎市鍛冶屋町) 2019.03.03

中川八幡神社(長崎市中川) 2019.03.03

山王神社(長崎市坂本) 2019.03.03

五社稲荷大明神(長崎市西坂町) 2019.03.03

西山神社(長崎市西山本町) 2019.03.03

伊勢宮(長崎市伊勢町) 2019.03.03

宮地嶽八幡神社(長崎市八幡町) 2019.03.03

天満宮(長崎市伊勢町) 2019.03.03

松嶋稲荷神社(長崎市本河内) 2019.03.03

八剣神社(長崎市東小島町) 2019.03.03

大崎神社(長崎市本石灰町) 2019.03.17

梅園身代り天満宮(長崎市丸山町) 2019.03.17

玉泉神社(長崎市寄合町) 2019.03.17

楠稲荷神社(長崎市西小島) 2019.03.17

菅原神社(長崎市西小島) 2019.03.17

若杉稲荷神社(長崎市西小島) 2019.03.17

---

noda@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp

